様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ３０ 年　 ５ 月 ２０ 日現在

機関番号：３２６６３
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2014～2017
課題番号：２６７７００８８

研究課題名（和文）室町時代における『太平記』の異本生成過程の研究

研究課題名（英文）A study on the reason why various texts of "Taiheiki" were born in the Muromachi period

研究代表者
和田　琢磨（WADA, Takuma）

東洋大学・文学部・准教授

研究者番号：４０３６６９９３

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,200,000円

研究成果の概要（和文）：14世紀から17世紀にかけての時代、いわゆる南北朝・室町時代に『太平記』はどのような書として認識されていたのか。この問題を追及するために、本文異同の分析、作品の読解、享受資料の検討を行った。これにより、神田本『太平記』が15世紀の異本生成の過程を知る上で重要な伝本であること、半ば定説化している『太平記』は室町幕府の正史（的存在）という説は成り立ちがたいこと、8代将軍足利義政周辺に異本的存在である天正本『太平記』が存在していたことなどを明らかにした。

研究成果の概要（英文）：From the 14th century to the 17th century, I studied what type of book was recognized as "Taiheiki".In order to clarify this fact, I mainly carried out research from three viewpoints.The first is research on processes with various texts.The second focused on the way the emperor was drawn, and made a detailed reading of the text.Third, I thought about how "Taiheiki" was being read.
As a result of this research, it was found that the characteristics of the text generation in the 15th century were specifically left in Kandabon "Taiheiki".In addition, it could be pointed out that the theory that "Taishiki" is a public history book of the Muromachi shogunate is suspicious. Furthermore, it was possible to clarify that the unique type of Tenshobon "Taiheiki" existed around the eighth general Shogun Ashikaga Yoshimasa.

研究分野：日本中世文学

キーワード：太平記　南北朝時代　室町時代　天皇　室町幕府　守護大名　禅僧

１．研究開始当初の背景

諸本の把握は軍記研究にとって必須の課題である。現在、『太平記』の諸本は、甲・乙・丙・丁に分類するのが一般的である。なかでも甲類が古い姿を留める古態本とされ、その主要伝本の１つに神田本がある。しかしながら、神田本の研究は 40 年ほど進められていない。また、南北朝・室町時代の『太平記』が如何に読まれていたのか、どの様な書として認識されていたのかという問題についても、1990 年代以降しばしば提示されている室町幕府の正史（的な存在）という説以外にだされていず、旧説の検証もなされていない。つまり、『太平記』の本文異同を丁寧に分析し異本本文の生成について検討し、あわせて『太平記』の享受の様相が具体的に分かる資料を分析することを通して、上記の問題について考えてみる必要があるのである。こういった背景を踏まえ、神田本等の古態本『太平記』を中心に据え、『難太平記』等『太平記』に言及している資料を検証し直すことで、南北朝・室町時代の『太平記』の姿を見直す必要があると考えたわけである。

２．研究の目的

『太平記』は 14 世紀日本の動乱の様を俯瞰的に描いた唯一最大のテキストである。本研究では、神田本等、南北朝・室町時代の『太平記』や古記録といった当時の資料を実証的に研究することを通して、中世における『太平記』の姿を、可能な限り具体的に明らかにすることを目的とする。これにより、南北朝時代を代表する文学作品『太平記』の特徴の一端を明らかにするとともに、中世社会における『太平記』の位置付け、人々の指向性の一端を具体的に理解することを目指す。

３．研究の方法

本文異同の比較を通して室町時代の『太平記』の現状を可能な限り正確に把握し、その上で改訂作者がどのような作品世界を構築しようとしていたのかを追究した。また、南北朝・室町時代の『太平記』の享受資料の分析を通して中世の『太平記』の位置付けを探った。さらに、本文の異同にも目を配りながら、古態本『太平記』の読解を通して、『太平記』の表現世界について考えた。主に天皇に対する批判性という観点から分析を加えた。

４．研究成果

（１）これまでの研究成果 21 本の論文を一書にまとめ、『難太平記』研究、『太平記』の生成論、『太平記』の表現世界や享受の問題について論じた。この書の中では、従来なおざりにされてきた『難太平記』と『太平記』の生成論の研究史も整理・検証してあり、問題点を浮き彫りにしてある。今回の研究の基礎となる事柄も整理してある。

（２）神田本『太平記』の研究史を整理し、切り継ぎや異本本文の書き込みを分析した。その結果、古態本としてのみ注目を集めがちであった神田本であるが、むしろ 15 世紀の『太平記』の本文改訂の姿を探る上で重要な要素を持っていることを指摘できた。また、複雑な書き込みがある巻 32 の本文の検討を通して、神田本は、複数の伝本の比較結果が書き込まれたものを踏まえて書写されたものであろうことを明らかにした。これにより、室町時代の『太平記』の異本生成の具体的姿を明らかにすることが出来た。

（３）今川了俊著『難太平記』や『宣胤卿記』所収今川氏親書状の分析を通して、南北朝・室町時代における『太平記』の享受の様相を明らかにした。この研究により、了俊と氏親の『太平記』観は同様のものであり、今川氏の認識は守護大名の一般的な認識で、『太平記』を室町幕府の正史（的存在）と見なしていたとする通説を見直すべきだという半ば定説化した見解に見直しを迫ることに成功した。

（4）南北朝時代から室町時代初期に書かれた『難太平記』や『明徳記』、室町時代中期八代将軍足利義政に近似した禅僧周麟が著した『大館持房行状』といった、『太平記』と同時代、隣接する時代の資料や作品も視野に入れながら、南北朝・室町時代の守護大名や将軍近臣が『太平記』や軍記をどの様に認識していたのかについて考察した。その結果、今川了俊のように『太平記』に自家の功績が記されていないことを批判し、加筆訂正を求めた人物は、立場上不利な位置に置かれた人物であり、成功している人物は『太平記』を過去の物語と認識していたであろうことを指摘した。また、将軍すら『太平記』を借りて書写していたと考えられている室町時代中期の将軍家周辺において、特異な本文を有する天正本系『太平記』の本文が流布していたこと、将軍近臣の家柄でも『太平記』を利用して先祖が足利氏を窮地に追い込んだなどとする歴史を創出していたこと等を明らかにした。

（5）『太平記』における天皇の描かれ方を中心に、中世における『太平記』の姿を作品論の視点から考察した。従来は、後醍醐天皇のみが強烈な意思を有した天皇であり、対する光厳天皇は従順な天皇として考えられてきた。また、生前の後醍醐天皇と死後怨霊化した後醍醐天皇という観点から、『太平記』を 2 部に分けて考えるという説も提示されてきた。しかしながら、本研究により、『太平記』に描かれた天皇全員が他者の意見を聞き入れず自らの意思を通していること。それ故に、乱世が続いたのだとするのが『太平記』の語るところであることを示し、旧説に見直しを迫った。また、怨霊後醍醐が後半の作品世界を支配しているという説も成り立たないことを明らかにした。

（6）丁類の重要伝本でありながら複写が許可されていないために研究が進んでいない阪本龍門文庫蔵豪精本『太平記』の継続調査を行った。今期の調査では、従来報告されていない本文の特徴を発見することが出来たので、この成果を今後活かしていきたいと考えている。

（7）ニューヨーク公立図書館所蔵の『太平記絵巻』や『呉越物語』といった『太平記』の享受を考える上で重要な作品を調査した。また、今期の海外調査において、従来知られていない伝本を実見することが出来たので、今後調べていきたいと思う。

5．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計７件）

①<u>和田琢磨</u>、『大館持房行状』に見る五山僧の『太平記』受容――『太平記』を利用した家伝の作成――、季刊悠久、151、査読無、2017、73-84、

②<u>和田琢磨</u>、今川氏親の『太平記』観、シリーズ日本文学の展望を拓く５資料学の現在、査読無、2017、215-230

③<u>和田琢磨</u>、乱世を彩る独断――『太平記』の天皇たち――、東洋通信、53(6)、査読無 2017、　15-29

④<u>和田琢磨</u>、今川了俊と『太平記』」、太平記』をとらえる、3、査読無、2016、78-103

⑤<u>和田琢磨</u>、室町時代における本文改訂の一方法――神田本『太平記』巻三十二を中心に――、『太平記』をとらえる、2、査読無、2015、174-199

⑥<u>和田琢磨</u>、十四世紀守護大名の軍記観、いくさと物語の中世、査読無、2015、177-199

⑦和田琢磨、神田本『太平記』本文考序説――巻二を中心に――、『太平記』をとらえる、1、査読無、2014、186-209

〔学会発表〕（計３件）

①和田琢磨、『太平記』の為政者像――明君不在の物語を考える――、早稲田大学国文学会 2015（平成 27）年度秋季大会、2015

②和田琢磨、『太平記』と今川氏、軍記・語り物研究会 2015 年大会、2015

③和田琢磨、神田本『太平記』の本文をめぐる一考察、『太平記』研究国際集会、2014

〔図書〕（計１件）

①和田琢磨、新典社、『太平記』生成と表現世界、2015、510

〔産業財産権〕

○出願状況（計０件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計０件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

６．研究組織
(1)研究代表者
和田　琢磨（WADA，Takuma）
東洋大学・文学部・准教授
研究者番号：40366993

(2)研究分担者
（　　）

研究者番号：

(3)連携研究者
（　　）

研究者番号：

(4)研究協力者
（　　）